

南アフリカ国事情の変遷

4組 大野正夫

私は、1975年、1996年、2001年と今年2月にケープタウンに滞在した。同じ所にほぼ同じ季節を訪れたので、ケープタウン街の変化を記述する。1975年3月は、南極観測隊16次夏隊で帰路に寄港した。35歳の時であった。ケープタウン地区は、アフリカの南端で良港であるので、帆船時代から栄えている。南アフリカ国の気候は地中海気候で灌木平原が広がっており温暖差が少なく住みよいところである。ワインの産地でもある。ヨーロッパ人が多く住み経済的にも繁栄していた。しかしアフリカ人の労働力があつたからである。

人種差別を公然と行いアフリカ人との交際は厳禁されてきた。アフリカ諸国がアフリカ人を中心とした政府が生まれた1945年以後に、アパルトヘイト（人種差別）制度を施行した。白人と異色人とは、教育、職業、居住も別にした。日本人は名誉白人であり、中国人や韓国人は異色人であった。我々の入るレストランには白人と日本人だけであった。当時はマグロ船の寄港が多くて、かなりの日本人を見かけた。レストランで、大声で話す漁船乗組員の態度が気になった記憶がある。英国式バスの2階だてであり、白人は2階であった。友達とバスに乗った。階段が面倒で1階の車内に入ろうとしたら、運転手は2階を指さした。逆らうこともないので、2階への階段を上った。

1997年にケープタウンで国際ワークショップがあつた。アパルトヘイトがなくなって3年後で、空港の入国審査官は全員アフリカ人であり異様に感じた。「公務員はアフリカ人を多く採用することになった」と知人が言った。しかしホテルのフロントマンは、白人であり宿泊者にはアフリカ人はみかけなかった。私達が入るレストランでもアフリカ人は見かけなかった。

2001年に、再び国際シンポジウムがあつた。ケープタウンは気候がよく、

開催施設が充実しており、ヨーロッパ諸国は国際会議開催を希望する。この時にはホテル内にアフリカ人を見かけるようになった。しかし何となく遠慮しているような感じを受けた。ケープタウンには、多くの国から観光客が来ているが、アフリカ人と思われる旅行者は見かけなかった。我々はウォーターフロントという古い建物が残っている観光ポイントで、毎日夕食をした。この地区にも、ほとんどアフリカ人は見かけなかった。

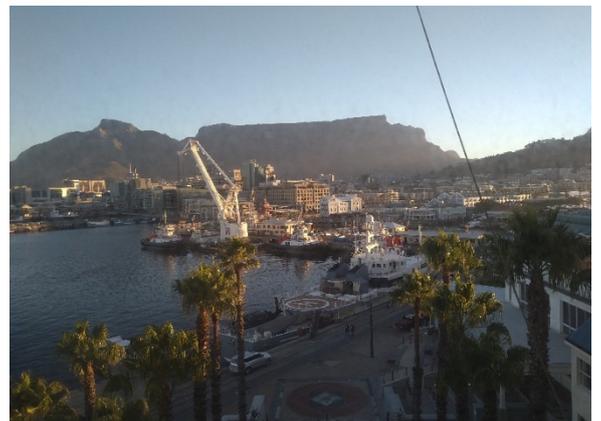
今回（2022年2月）は、国連の貧困対策のために海藻養殖開発提案する案件で行った。ウォーターフロントの古くからあるホテルに泊まり、港町を散策した。コロナ禍でヨーロッパ人旅行者は少ないこともあるが、写真に示すように街中の広の階段にはアフリカ人の若者が占領していた。広場では民族衣装で歌うショーが開催されており、多様な人種が集まるところになっていた。多くのレストラン内もアフリカ人家族が多かった。知人は、「現在アフリカ人実業家が育ちつつあり、アフリカ人中産階級層も増えている。レストランで食事をしている多くは、中産階級と言われる人々である。しかし失業者が50%という実情もある、この国を変えてゆくには、多くの人種が優和して新たな産業を起こして、多くの職場を作ることである」と言った。南アフリカで、治安が悪いのは大都市の一部であり、地方の治安は良い。ケープタウンを中核として、多くの産業を起こし、中産階級層を増やしてゆくことと、北・南・東・ケープ州に産業を起こすことである。今までは内部地区の鉱物資源に頼った国造りで、過酷なアフリカ人の労働力が必要あった。鉱物資源の衰退が、多くのアフリカ人の就労場所をなくし、彼等は都市部に移動し貧困地区を作った。2001年の訪れた時に、これらの地区が、粗末はトタン屋根の家であったが、今回の上空からみた光景は、スレート屋根になっており、きちんと区画整理された道になっていた。現在の南アフリカの評価は難しいが、南アフリカ政府は、貧困対策には力を注いでいることは確かである。



テーブルマウンテンを背にして



昔のケープタウンの港街。



現在のケープタウンの港町



アフリカ人の若者が集まるケープタウン町のウォーター・フロント広場。



ケープタウンの郊外、サバンナ地帯で灌木が多い。



水族館で育つ大型海藻、ケルプ海中林(コンブの仲間)

(完)